



# 神聖かまってちゃんと与謝野晶子

## —思想の背景のないラブソングを根こそぎ殺す詩

「文壇が行きづまったという声を聞きますが、すでに疲れている作家の生活が行きづまることはあっても、新しい作家の前にある文壇は新しい仕事でいつも曙光の海のように輝いているはずです。わたしは日本婦人がこの方面にも活動の希望の多いことを喜ぶたいと思います」

日本の歌人、作家の与謝野晶子の言葉である。

少年マンガ雑誌で人気を得る女性マンガ家が増えてきた。『鋼の錬金術師』や『銀の匙 Silver Spoon』の荒川 弘。『大きく振りかぶって』のひぐちアサ。『モテキ』や『アゲイン』の久保ミツロウ。『3月のライオン』の羽海野チカ。八〇年代、九〇年代に高橋留美子という大天才はいたものの、複数の女性マンガ家が同時代に活躍するのはめずらしい。

与謝野晶子はエッセイで、人間の素質は男女平等であって、女性の素質は男性に比べて劣っても不足してもいないといっている。そしてこう続けている。

「“婦人は感情的に傾いているからきっと文学に適する”と考えるのも間違いです。現代の人は男も女も感情ばかりでは生活することができなくなりました。理知と感情と意志との三つが平衡を得て協力するのではなくて、真実の意味で個人の独立はむつかしく、何かにつけて他人の見識に盲従しなくてはなりません。」



与謝野晶子は女性だからといって優れているともっていない。その視線はとても冷静である。さらにこう続ける。

「思想の背景をもった感情の表現でないものは文学として現代の人に何の感銘もあたえない

ことになっております。人生に対して真面目な煩悶や深刻な同情があったり、自分一家の新しい哲学があったりすることが今日の文学の重要な価値であるのです。」

今日のロックバンドやシンガーソングライターはプロの作詞者の提供をうけない。彼女の言葉はそれらミュージシャンにあてはまる。かつて、プロの作詞家と作曲家による歌を歌うのが歌手だった。演歌、歌謡曲の創世記である。

そのアンチテーゼとして現れたのが自分で歌詞と曲を作って歌うフォークのミュージシャンだ。

さらにそのフォークシンガー勢へのアンチテーゼがニューミュージックと呼ばれるものだった。その時代までは、歌はその時代を映し出していたという。偉大な作詞家である阿久悠はそれら昭和の歌謡曲のことを「歌謡曲は時代を喰って育てていった」と評した。

平成になってそれが崩れた。まっさきに崩したのは吉田美和率いるドリームズ・カム・トゥルーだといわれている（宮台真司いわく）。平成から現れたミュージシャンは時代の歌ではなく「個」の歌を歌うというのだ。それを先鋭化したのが西野カナやいま最前線にいるJ-POPの歌手たちだと想う。

個を歌うということに批判はない。しかし、いまテレビ出演をしているJ-POP歌手たちはあまりにも軽薄すぎる。歌を聴いていると、同じような言葉を連発しているように感じてしまう。「好きだ」「愛してる」を聴くと、ああまたか、と萎えてしまうのだ。彼らがほんとうに無自覚なら仕方ないとは思いますが、これだけマスメディアがつまらない一辺倒なラブソングを好むのなら我々の居場所はとてもせまい。

いや、さて、彼らが無自覚にそんな歌を作ってるとしたら大問題だ。それにちっとも疑問をもたないリスナーも大問題だ。彼らの歌は感情こそ吐露するが、それにはとても与謝野晶子がいう思想や哲学をまったく感じない。ただただ自分と相手との関係性だけで物語が完結する。ラブラブな男女のメールのやりとりをパラッと見せられる感じだからだ。曲に入り込むことができない。



ラブソングが悪いというわけではない。ただ、彼ら彼女らの作る歌には圧倒的に思想や哲学がない個なのだ。個性がないラブソングである。だから、われわれは退屈に感じてしまう。

神聖かまってちゃんは圧倒的な個がある。例えば、の子（ボーカル）がアニメに提供した『Os-宇宙人』という曲がある。



彼らには珍しくラブソングだった。これはアニメの主題歌ということで、ボーカルは声優が務め、それまでのの子の曲は雰囲気がちがうものになっていた。

しかも、《あなたのことが好き》という言葉が連呼している。あの、J-POPたちが連呼している、われわれにとっては憎くい言葉である。「神聖かまってちゃん、あのJ-POP歌手たちと同じくメディアに魂を売ってしまったのか」と思われるべき行為だった。しかし、曲を聴いてみると、そこにはかき消されない圧倒的な個があった。にじみ出る個というものか。とても素晴らしかった。抜粋するが、こんな歌詞だった。

《不安定、バイトできない／会話出来ない 空見上げる／サボり学生、パジャマ着てる／夏休みが、来ずに中退／テレパシる気持ちが、電波が違っても／きっとね何か掴んでくれてる あなたのことが好き 》

主人公はきっとひ弱な心の持ち主だ。学校には居場所はなく、バイトをしようと思ってもそれが怖く感じていることが分かる。そして、ついに中退してしまったようだ。これは圧倒的な個である。誰がこの曲を歌おうと、の子の匂いがまったく薄まらない。

主人公は、まだ見ぬ誰かに恋をしている。自分にとっての誰かが必ずいるはずだと信じている。谷村新司の作った『いい日旅立ち』の《あなたを待ってる人がいる》という歌詞に通じており、つまりこれは孤独な主人公のラブソングだ。

この曲は最後にある言葉が連呼される。

《そんなあなたのことが好き》

誰からも肯定されることのない孤独な主人公がだれにも自分を見せることができないなか、最後の祈りのように繰り返される言葉、それが《そんなあなたのことが好き》である。

男は孤独が好きだし、一人でも生きていけるというモチーフは歌謡曲に多い。しかし、それはある程度人生を重ねた男の心情、もしくはロマンを追う若い青年という設定だ。一〇代がみるよ

うなアニメの主題歌には合わない。

しかし、の子の作った『Os-宇宙人』は一〇代に届くような形のラブソングになっている。

それは孤独な男のラブソングのていをなしているが、実際のところ、ひきこもりがちでアニメを観るような少年少女のことを肯定する、純度の高いロックンロールになっている。

サビで真っ当な言葉《あなたのことが好き》を使っているのに、聞いたときにまったく照れくささを感じないのは不思議だ。それは、この曲がとても優れているからだろう。こんな優れた曲はブルーハーツの名曲『リンダリンダ』以来聴いたことがない。

の子の作ったその楽曲は、他のだれにも替えがきかないと思わせる圧倒的な個性があった。なんだか、正直なのだ。ウソをついていないのがすぐ分かる。いや、ウソはついていいな。ウソはついていてもいいのだ。ただ、リスナーに対して正直であってほしいのだ。自分の思想や哲学に対して誠実であってほしいのだ。



それはなかなかむつかしいことだと想う。世間が気に食わなくてJAPANを読んでるリスナーなら、ミュージシャンの曲を聴いてその人が正直でいようとしてるかが分かるだろう。ひきこもってシコシコ雑誌を読んでるような繊細なわれわれなら、気付けるだろう（たぶん）。

ラブソングを憎んでいたわたしだが、この曲を聴いて、ラブソングというのは表層こそラブソングだが、製作者の思想や哲学があるならば、べつの機能をもつということが分かった。

与謝野晶子はこういつている。

「書きたいことをまず大胆に書きつけてみて、そのできあがったものが詩らしい気分を満たしていれば詩であり、詩と小説の合いの子のようなものであればそれでも好し、手紙の形になっていてもかまわず、在来の文学のどの種類にもあてはまらないものであってもさらに好い、ただそのできあがったものの価値は、それがどれだけ自分の実感の真実を写して、どれだけ新しい創造の分子に満ちているかということにあるという態度で制作したいと思います。」



神聖かまってちゃんと与謝野晶子 ――思想の背景のないラブソングを根こ  
そぎ殺す詩

<http://p.booklog.jp/book/87395>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87395>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ